

いつもお世話になっています。

手記を送らせていただきますのでよろしくお願ひいたします。

書き溜めていた手記のデータを一度吹っ飛ばしてしまい、思い出しながら再度書き起こしたので文脈がおかしくなっているところがありましたらすみません…まだまだ書ききれてない部分もあるように思いますが、時間も経っていますので一旦お送りさせていただきます。

(病院は病気を治す為に生まれたものでありますが、現代の医療機関は病気を作って医療関係者やお金が儲かるシステムに堕落しています。元来、病気を治すのは医者でもなく薬でもないのですが、古来から無知で愚かな人類の祖先たちは、こんな真実を知る由もありませんでした。今も昔も同じですが、病気の正しい概念が全くなかったので、人間の体に異常な事態が起こったときは、ただただオロオロし、手をこまねいて神に祈るしかなかったのです。それでもなんとか手当てをしたいというわけで、数千年前に生まれた古代文明において手探りで医療行為が始まり、その中心をなすものは薬草でありました。とりわけめざましい経験医学として生まれたのが中国医学でありました。彼らはいわゆる病気と戦うのは人間の免疫であるとは露知らずして、漢方薬や鍼灸が病気を治す為の最高の医療であることを二千年以上前に確立しきったのです。

19世紀に西洋医学が病気の原因は病原菌であるという事が発見され、徐々に免疫学が発達し始め、ワクチンが生まれ、抗生物質が生まれ、最後に抗ウイルス剤が生まれ、現在に至ったのです。ところが人を殺す病原菌が制圧されたのにもかかわらず、新たなる病気が生まれだしたのです。それがアレルギーであり膠原病であるのです。これらの病気の原因は、人体にとって不必要な異物であり、それは人間が科学や文明の名において作り出した快適さをもたらす化学物質であることが明々白々であるにもかかわらず、現代の医学者たちは原因不明の病気だと言いまくり始めました。医学者たちは最後まで嘘を言い張り続けたために、アレルギーは免疫の暴走であると言ってみたり、膠原病は自己の免疫が自分を攻撃するという自己免疫疾患だと言いまくり続けてたりしています。(『自己免疫疾患はない』という私の論文は[ここを読んでください](#)。)ハチャメチャな論理を使い、言葉に窮すると分からないと逃げまくり、医薬業界は医学部の権威ある大学教授に研究費という名において賄賂を渡し、金儲けのために人間としての最低の倫理観も、患者に対する同情心も、学者としての誠実さも良心もかなぐり捨てて、金儲けに奔走しているのです。

一方では免疫の素晴らしさを讃えながら、他方では白昼堂々と38億年かかって進化した人間の免疫を殺し続けることに日夜邁進し続けていることに、何の罪も意識もなく、反省もなく、性懲りもなく、自己の“利己的な遺伝子”だけを満足させ、他人の“利己的な遺伝子”を傷つけることに喜びを感じる以外、一切興味を示さないのです。人間は自己の遺伝子を最大限満たす努力はすべきだし、その為に生きるべきですが、他人の利己的な

遺伝子を傷つけて生きることは絶対に許されません。それをやれば犯罪と言われても仕方のない行為となるのです。

2, 3日前に熊本大学医学部の先生でおられた原田先生がお亡くなりになりました。彼は有明海の水俣病の原因である有機水銀は、妊娠中の母親の臍帯から胎児に侵入し、胎児性水俣病が起こっているという事を世界で初めて指摘したのでありますが、長い間黙殺されたのです。それまでは母親から摂取された化学物質、つまり毒物は胎児には摂取されないというのが定説でした。こんなことは臍帯血を採って見ればすぐに分かることではありますが、大化学会社であるチッソを守るために、日本の化学会社を経営している資本家たちは、学者に金を渡して原田先生の真実を葬り去ろうとしたのです。その間に有明海の魚介類を食べ続けた妊婦から生まれた子供が、先天性水俣病である脳性麻痺を持って生まれ、その後どれほど苦しんだかについて、誰が責任を取ることができるのでしょうか？金さえ儲かれば全て良しという、アメリカのユダヤ人が支配する地球的資本主義は、人類の破滅を確実にもたらすことになるでしょう。

なぜ胎児は化学物質を母親からへその緒から通じて摂取したときにその影響が大きいのでしょうか？答えは極めて簡単です。1個の受精卵から10ヶ月かけて赤ちゃんとして生まれるまでに、3兆個の細胞まで分化発達していかなければなりません。とりわけ人間が人間たる所以である高度な神経系を発達させるためには、いかなる化学物質からの影響も避ける必要があります、このような化学物質の影響を受けると完璧な神経系ができあがらないのです。生まれた赤ちゃんのへそからどのような化学物質があるかを調べれば、妊娠期間中に母親が摂った環境汚染物質にどれだけ胎児がさらされていたかが分かるのです。このへその中には文明が作り出した何百種類という化学物質が含まれていることが判明しております。恐ろしいことです。

過去において胎児に影響を与えた化学物質による3大被害が有名であります。まずは今述べた1950年代に確認された有機水銀で汚染された魚介類によって生じた胎児性水俣病であります。2番目が1960年代に世界中で発生したサリドマイドによる奇形児の先天異常であります。3番目は1970年代に人工的に合成された女性ホルモン剤のDES（ジェチル・ステルベストロール）による薬害です。DESによる薬害は出生時には以上は見られなかったのですが、出産した子供が思春期になるときに癌や生殖機能の異常が見られて初めてその原因がDESであることが分かったのです。このように生まれたときには分からなかった薬害が、成長と共に何年後かしてから出現するという奇怪な病気を起こすことが化学物質による薬害の怖さであります。

へその緒から検出される主な化学物質を列記しましょう。1番目はなんと言ってもダイオ

キシソ類であります。このダイオキシソ類は一度体内に摂取されると排泄されにくく蓄積性があり、人体の脂肪にたまるので、へその緒のみならず現代人の血液からは100%検出されているのであります。2番目がPCB（ポリ塩化ビフェニル）という有機塩素化合物であります。これも水に溶けにくく、脂肪に蓄積しやすい化学物質であります。次いで、3番目がかの有名な殺虫剤であり、現在では使われていないDDT（ジクロロディフェニルトリクロロエタン）であります。これは“奇跡の殺虫剤”と呼ばれたほど強力な毒性を持っています。このDDTを作り出したミユラーという男は1948年にノーベル生理学・医学賞を受賞したほどであります。皆さん、ノーベル賞は間違って受賞した人や、さらにノーベル賞の間違いを免責するものではないと知ってください。4番目はDDTの代謝産物であるDDE（ジクロロディフェニルジクロロエチレン）です。5番目はヘキサクロロベンゼンであり、殺菌剤・防カビ剤として使われてきました。現在は製造・輸入が禁止されています。6番目は農薬や家庭用殺虫剤として使われてきたヘキサクロロシクロヘキサンです。7番目は農薬で有名なエンドサルファンです。8番目は農薬として使用とされ、船底の塗料として用いられてきたトリブチルスズです。このトリブチルスズは環境ホルモンとしても有名であります。微量のトリブチルスズが海の巻貝のメスにペニスを発生させるからであります。最後は、全ての人をご存知のようにカドミウムであります。カドミウムはイタイイタイ病の原因となったのでご存知でしょう。富山県の神通川流域の鉱山において、鉱石を掘り出したり精錬したりするとき、鉱石の成分であるカドミウムが溶け出しました。これが神通川流域の住民が摂取した水に含まれていたために骨軟化症や腎障害が発症したのです。その他、何百種類の化学物質が検出されています。

皆さん、ここでお分かりのように、多くの化学物質は農薬や殺虫剤であります。農薬の入っていない食べ物がこの世にありますか？農民の労働力を減らし、収穫量を減らすために文明が作り出した農薬が毎日毎日体内に摂取されるのです。これを人体の免疫が排除しようと思いませんか？まさにこの農薬を体から排除しようとするのがアレルギーなのです。しかし世界中の医学者や薬学者は一切認めようと思いません。

ダイオキシソにまつわる様々な世界的なニュースについて、ついでに書いておきましょう。皆さん、最新のダイオキシソにまつわるニュースは、アメリカ軍が沖縄にこっそり埋めたという話です。なぜアメリカ国土まで持っていかなかったのでしょうか？ダイオキシソでアメリカの国土を汚染させたくなかったからです。日本の沖縄であれば誰も文句は言えないと考えたようですがバレてしまいました。

また、普通に新聞をお読みになっている方であれば覚えてらっしゃると思いますが、2004年にウクライナのユーシェンコ大統領が、恐らくはロシアのスパイに暗殺されかけたときに飲まされたダイオキシソによって、ハンサムな顔が見るも無残な“塩素ニキビ”とい

われる顔になったことを覚えておられるでしょう。これはダイオキシンに含まれる化学物質である塩素類を、ユーシェンコ大統領の正しい免疫の遺伝子の働きによって皮膚から排除した結果なのであります。大統領にとって不必要な化学物質を、彼の優れた免疫は皮膚からダイオキシン類を排除しようとしてアトピーになったのです。ちなみに大人のニキビは、毎日摂取している化学物質をアトピーでニキビの穴から出し続けるので、アトピーを治さない限り大人のニキビを治すことはできないのです。

年をとったお方は覚えていらっしゃると思いますが、1968年に九州北部を中心にPCBが混入した米ぬか湯を調理に使った食品を食べた人々の皮膚が黒くなったり、その地域の胎児が“黒い赤ちゃん”として生まれ、カネミ油症という大騒動を起こしました。このカネミ油症についてwikipediaから引用した文をコメントしながら、アトピーの原因が化学物質であることを立証しておきましょう。

福岡県北九州市小倉北区（事件発生当時は小倉区）にあるカネミ倉庫株式会社で作られた食用油（こめ油・米糠油）「カネミライスオイル」の製造過程で、脱臭のために熱媒体として使用されていたPCB（ポリ塩化ビフェニル）が、配管作業ミスで配管部から漏れて混入し、これが加熱されてダイオキシンに変化した。このダイオキシンを油を通して摂取した人々に、顔面などへの色素沈着や塩素挫瘡（クロールアクネ）など肌の異常、頭痛、手足のしびれ、肝機能障害などを引き起こした。また、妊娠中に油を摂取した患者からは、皮膚に色素が沈着した状態の赤ちゃんが生まれた。胎盤を通してだけでなく、母乳を通じて新生児の皮膚が黒くなったケースもあった。この「黒い赤ちゃん」は社会に衝撃を与え、事件の象徴となった。（まさに生後まもない赤ちゃんが、母親を通じて摂取された化学物質を皮膚から出そうとしているのがアトピーであります。世界中の嘘つき医学者がそれを認めようとしないのです。「学者よ、良心を取り戻せ！」と叫びたいぐらいです。「お前たちは真実を求める学問で飯を食っているのに、なぜ嘘をつくのか」と言いたいのです。)

2002年に坂口厚生労働大臣が、厚生官僚の反対を押し切り「カネミ油症の原因物質はPCBよりもダイオキシン類の一種であるPCDF（ポリ塩化ジベンゾフラン）の可能性が強い」と認めた。現在、原因物質はPCDF及びCo-PCBであると確定しており、発症因子としての役割は前者が85%、後者が15%とされている。（官僚が国民のために仕事をしているのではなくて、金を持っている企業のために仕事をしている証拠の一つです。官僚の権力と大企業の金が結びつくと鬼に金棒ですから、やりたい放題であります。真実などは官僚や資本家は全く興味がないのです。金さえ儲ければいいのです。何のための厚労省なのでしょうか？それは病気の原因を隠し、医薬業界にさらに間違った医療をさせることによってお金を儲けさせるためなのです。悲しいことです。もっと悲しいことは、このような悪の真実を一般大衆が誰一人として本気で考えようとしないことです。どっちもどっちですね、アハッハ！)

この事件の患者発生の直前である 1968 年春、同社製の「ダーク油」を添加した配合飼料を与えられた鶏 40 万羽が変死したのも、P C B が原因だった。

(カネミ油症事件が起こる前に、既に実際の動物実験が行われていたにもかかわらず、原因不明として処理されてしまっていたのです。人間の歴史を勉強すればするほど、権力と金と軍事力を持った悪が世の中を支配し続けていることを知るばかりですが、どうにもなりません。地球の消滅までこの恥ずべき真実は永遠に続くでしょう。悲しいことです。人類が減びて初めて地球に平和と安寧が取り戻されるでしょう。人間以外の種のために人類だけの絶滅を希求することが唯一地球を守る方法なのでしょう。アッハッハ！)

実は最も人類に対する罪を犯したのは、アメリカがベトナム戦争で使ったダイオキシン類です。ベトナム戦争が華やかになりしときに、密林に隠れたベトコンのゲリラ戦法にほとんど手を焼いた悪の枢軸であるアメリカ軍は、密林を全て枯らしてしまおうという恐るべき作戦に出ました。それに用いられた薬剤がエージェント・オレンジという枯葉剤でありました。このエージェント・オレンジという枯葉剤を含んだ飲食物を摂取した母親から生まれた赤ちゃんが「ベトチャンドクちゃん」だということは日本の皆さんならご存知でしょう。彼らはダイオキシンによって、上半身 2 つが 1 つの下半身で Y 字型に繋がった奇形児になってしまったのです。そして胴体を切り分けるために、日本の優れた外科手術を求めて来日したニュース、手術が成功したニュースが大々的に報道されました。ドクちゃんは助かり立派な大人に成長したことも報道されました。一方、ベトちゃんは悲しい運命に終わったことは皆さんご存知でしょう。しかしながらアメリカ軍は、この奇形児はダイオキシンの影響によって生まれたという事を頑強に否定し続けたのです。金と権力と軍事力が真実をいとも簡単に捻じ曲げることができる事実として歴史に残る証拠の一つです。

話は変わりますが、結局はベトナムも共産主義国家では成り立たなくなることに気づいて、アメリカの真似をして資本主義国家をバリバリやっていますから、一体ベトナム戦争というのは何の意味があったのでしょうか？教訓の一つは、他国を侵略したり、内政干渉はやめたほうが良いという結論ですが、相も変わらず他国にちょっかいを出したがる一大帝国があります。他国に手を出すと自分の国もおかしくなることにやっと気づき始めたようですが、時既に遅しで、世界中が資本主義自身が、いや民主主義自身がおかしくなりつつあることに気がつき始めたようです。ここでこの最悪の枯葉剤について再びwikipediaから引用した文に対してコメントしましょう。

枯葉剤 (かれはざい) は除草剤の一種で、うちベトナム戦争で散布されたものはダイオキシン類の一種 2, 3, 7, 8-テトラクロロジベンゾ-1, 4-ジオキシン (TCDD) を高い濃度で含んでいる。

ベトナム戦争における枯葉剤

ベトナム戦争中に米軍と南ベトナム軍によって撒かれた枯葉剤は軍の委託によりダイアモンドシャムロック、ダウ、ハーキュリーズ、モンサント社（除草剤・殺虫剤・遺伝子組み換えの会社であり、世界最大の遺伝子組み換えの種を持っている会社です。世界のシェアの90%を占めています。とうもろこしの遺伝子組み換えで有名な会社です。）などにより製造された。用いられた枯れ葉剤には数種類あり、それぞれの容器に付けられる縞の色から虹枯れ葉剤 (w:rainbow herbicides) と呼ばれ、オレンジ剤 (Agent Orange)、ホワイト剤、ブルー剤などがあった。（ダイオキシンの濃度によって製品名を変えただけで、実体はダイオキシン類そのものです。）

ベトナムで使用された枯葉剤のうち主要なものは、2,4-ジクロロフェノキシ酢酸 (2,4-D) と 2,4,5-トリクロロフェノキシ酢酸 (2,4,5-T) の混合剤であり、ジベンゾ-パラ-ダイオキシン類が含まれ、副産物として一般の2,4,5-T剤よりさらに多い2,3,7,8-テトラクロロジベンゾ-1,4-ジオキシン (TCDD) を生成する。このTCDDは非常に毒性が強く、動物実験で催奇形性が確認されている。（人間にとって人工化学物質は全く必要ではないのです。必要なのは水と酸素と5大栄養素だけです。それ以外のものは人間にとっては毒であり、人間になる前の胎児にとっては正常な人間にならせない毒物なのです。従って奇形が生まれてくるのです。近頃、常識を超えた頭が狂ったかのような若者が増えました。これも私は胎児期の化学物質による神経の奇形だと考えています。神経は外から見えないものですから奇形がないように見えますが、実は大脳皮質の奇形そのものだと考えています。果たして彼らに責任があるのか、化学物質を作り続ける化学会社に責任があるのかを問うべきです。）ベトナム戦争帰還兵の枯葉剤暴露とその子供の二分脊椎症の増加についてはこのTCDDとの関連が示唆された。なお、2,4,5-Tはアメリカ合衆国や日本では散布使用が許可されていない。ダイオキシン類が作用する分子生物学的標的は内分泌攪乱化学物質と同一のものであり、動物実験で催奇性が確認されている。ヒトに対する影響は不明であるとする否定意見があるが、これは人間に対しては動物のように実験を行うことが出来ないために不明となっているためである。（薬が認可される前には必ず動物実験をします。動物実験で見かけの効果があるという事になれば薬として認められる第一歩となり、その薬が積極的に評価されるのです。ところが同じような論理で考えれば、動物実験で催奇形性があるものは、人間にも催奇形性があるので使ってはいけないという結論になるはずなのですが、責任を逃れるために正しい論理が貫徹されないのです。人間と動物の遺伝子は全て同じです。ただどのような遺伝子が発現するかだけの違いですから、化学物質としての遺伝子としては全く同じなのです。従って、化学物質である遺伝子に他の人工的な化学物質が同じような影響があるという原理に基づいて薬というものが認められており、悪い化学物質はそれが原因で様々な副作用を起こしているわけですから、その化学物質に責任を取らせるべきなのです。つまりはその化学物質を作った会社に責任を持たせるべきなのです。しかし金

は儲けるだけ儲けますが、金を損する責任の取り方は拒絶するという、とんでもない世界が資本主義の世界の真実です。残念です。強い悪がいつまでもいつまでも世界を支配し続けることに慙愧の念を感じざるをえません。)

枯葉剤の散布は、名目上はマラリアを媒介するマラリア蚊や蛭を退治するためとされたが、実際はベトコンの隠れ場となる森林の枯死、およびゲリラ支配地域の農業基盤である耕作地域の破壊が目的であったといわれる。(アメリカ軍がいかにも嘘つきであるかがお分かりでしょう。悪い目的をいかにも口先では良い目的のためとすり替えるのはアメリカ軍だけではありません。例えば、アトピーの原因を活性酸素と言いながら、同時にステロイドを大量に使い続ける有名な病院があります。活性酸素が原因であれば、活性酸素を処理するといわれる SOD を多く含んでいる野菜だけを食べさせればいいのに、一方では免疫を抑えるステロイドを使いアホな大衆を騙しています。あるいは掌蹠膿疱症の原因はビタミン B のひとつであるピオチンだと言いながら、同時にこっそりステロイドの入った塗り薬を使わせる有名な病院もあります。ずる賢い人間は金儲けの目的のために、常にこのようなすり替え、つまり陽動作戦をやりますが、アホな大衆は論理性がなく、しかも知識もないものですから簡単に騙されてしまいます。アホな大衆も勉強すれば賢くなれるのですが、一番嫌いなのは勉強ですから、義務教育で無理やり教えられた論理も知識も忘れ去り、最後は空っぽの頭で死んでいきます。残念ながら欲だけは誰よりも強く頭は空っぽという悲劇が生じますが、本人は全く気づかないというところが喜劇というべきものです。アハハ！私がこの wikipedia を引用するのも、私のホームページを読みながら、さらに枯葉剤について勉強してもらいたいからです。つまらないテレビを見る暇があったら勉強しましょう!!!) 枯葉剤は 1961 年から 1975 年にかけてゲリラの根拠地であったサイゴン周辺やタイニン省やバクリエウ省のホンダンなどに大量に散布された。アメリカ復員軍人局の資料によれば確認できるだけで 8 万 3600 キロリットルの枯葉剤が散布された。コロンビア大学のジーン・ステルマンの調査では、散布地域と当時の集落分布をあわせて調査した結果、400 万人のベトナム人が枯葉剤に曝露したとしている。

1969 年 6 月末、サイゴンの日刊紙「ティン・サン」は枯葉剤散布地域での出産異常の増加に関する連載を開始したが、当局によりすぐさま発禁処分となった。(私はベトナム政府が自国民のベトナム一般市民がダイオキシン被害で苦しんでいる姿に同情しないのはなぜなのかと常に疑問に感じていました。なぜベトナム政府はアメリカに賠償保障を求めようとしないのか、ずっと不思議に思っていました。結局ベトナム政府も権力のトップであります。中国と同じように国家資本主義をやっております。彼らはこっそりとアメリカと裏取引をして、国民がダイオキシン禍で苦しんでいるにもかかわらず、権力層である自分たちだけが金を儲ければいいと考えている節があります。社会主義は必ず腐敗しますから、しかも資本主義であり金が第一となりますから、政府要人たちは国民などはどうでもいいのです。自分たちだけが繁栄すれば全て良しというわけです。中国と同じくベトナムも腐

敗の極みであります。賄賂をもらった権力者が利権を資本家に渡すというシステムが完璧に確立されています。人間の歴史を振り返るとギリシャの民主主義もローマの共和制も、全て食欲と嫉妬が支配してきました。今も昔も人間の心は全く変わっていないので、世界中が食欲と嫉妬で支配され続けています。正義や真実や他人のエゴを思いやる心は何処を探してもありません。残念です。)

同年 11 月 29 日、全米科学振興協会(AAAS)の年次総会にて、ハーバード大学のマシュー・メセルソン、バウマンらの散布地域における出産異常の激増に関する報告がなされた。同報告では、1959 年から 1968 年の異常児出産 4002 例を調べ、散布強化された 1966 年以降、先天性口蓋裂が激増していること、奇形出産率がサイゴンで 1000 人中 26 人、集中散布地域のタイニンで 1000 人中 64 人にのぼった事が報告された。また散布地域の母乳のダイオキシン濃度で最高 1450ppt を検出、平均で 484ppt と、非散布地域・国に比べて非常に高い汚染状況にある事が報告された。1972 年 6 月、ストックホルムでの国連環境会議で枯葉剤散布は主要議題となり、アメリカの批判派の科学者らから、ベトナムでの奇形児出産の増加を含む膨大な報告がなされた。

(報告されたところでダイオキシンをばら撒かせたアメリカのベトナム戦争当時の政府要人たちの責任は全く問われないのです。茶番劇です。民主主義の権力とは専制政治の皇帝の権力と同じです。好き放題の悪事をなしても罰せられないことがないという権力の本質は今も昔も変わりません。福島原発においてもそうであります。あれだけの大事件であり、かつこれからも続く悲劇であるにもかかわらず、誰一人も捕まった人はいませんし、裁判にかけられた人もいません。一体どういう事でしょうか？民主主義とは一体何なのでしょう？残念です。

国連も愚かな大衆を騙すパフォーマンスをやり続ける一機関に過ぎません。アメリカ軍がイラクを攻めるときには、まさに国連で認められました。認めた理由は、イラクが核兵器を持っており、かつアルカイダと接点を持っているという 2 点でありました。ところがイラクのサダム・フセインはアルカイダとは全く関わりもなかった上に、核兵器の“か”の字も出てきませんでした。戦争好きなブッシュ大統領は過ちを認めましたが「間違えました」と一言で終わらせてしまいました。あれだけの不幸をイラク国民にもたらしたにもかかわらず、国連はなぜ何の責任も取らせないのでしょうか？知らぬ顔です。悲しいことです。

最後に毒舌を吐かせていただきましょう。新しい権力の定義を一言でしてあげましょう。「権力とは専制君主である。」ワッハッハ！)

沖縄の枯葉剤保管疑惑

ベトナム戦争中枯葉剤が沖縄に持ち込まれていたことが、沖縄で勤務中に枯葉剤に被曝したとして健康被害の補償を求める米国退役軍人省の公文書や、保管されたマイクロフィルムで明るみに出た。米軍は1971年毒ガス類を撤去するための移送作戦「オペレーション・レッドハット」を行い、沖縄の枯葉剤もハワイ沖ジョンストン島へ移送されたとされる。沖縄で従軍した元兵士の疾患について枯葉剤による後遺症であると認められたものの、一方アメリカ政府は沖縄における枯葉剤の存在を否定している。(権力は専制君主であるために好きなことができます。好きなことが言えます。責任は一切取る必要がないのです。無視するか、いじめるかのどちらかをすればいいのです。被害者は常に泣き寝入りです。残念です。)

アメリカでの枯葉剤健康被害

1984年、アメリカのベトナム帰還兵らが枯葉剤製造会社に対して集団訴訟を起こした。訴訟に加わった帰還兵らは4万人を超えた。しかし、裁判が審理入りする直前になり、突如原告代表者が会社側との和解を発表、製造会社側は枯葉剤の被害を認めぬまま原告に補償金1億8000万ドルを支払うことで同意した。裁判で帰還兵らの枯葉剤健康被害が公にされる事がないまま、帰還兵らの証言はお蔵入りとなったのである。この突然の和解を不服とした帰還兵や遺族らが1989年に再び集団訴訟をおこしているが、却下された。(資本主義は正義や真実よりもお金が全てを決定します。お金の前では正義や真実はイチコロです。裁判官も出世して金を儲ける必要があります。資本主義の三権分立などというのはお飾りです。真実が世界を支配することができる力は何もないものですから、真実が金に権力に負けてしまうのは当然です。今の医療も全てが嘘です。しかし嘘の真実が医薬業界に金をもたらし、権力を維持させるものですから、金もなく権力もなく真実も何ひとつ知らない患者を煙に巻くのは赤子の手をひねるのと同然です。悲しいことです。)

1991年、アメリカの枯葉剤曝露帰還兵に対して救済法が成立し、15の疾病に枯葉剤との関連が認められた。ベトナム帰還兵の子供世代への健康被害調査も行われ、帰還兵の二分脊椎症の子供および女性帰還兵に限りその他の先天障害をもつ子供へも補償が認められた。しかしこれによって認められた枯葉剤の次世代への健康被害は限られたものであり、現在も多く帰還兵の子供の疾病や先天障害は枯葉剤との関連が不明であるとされている。(アメリカ政府は真実をどうしても知られたくないのです。やはり彼らも真実が怖いのです。ひとたび枯葉剤と先天障害の関連を認めてしまえば、全ての政策に対する信頼を失ってしまうからです。この事実を認めてしまえば、これをキッカケにあらゆる過去の嘘がばれ、かつ未来も嘘をつくことができなくなってしまうからでしょう。だからこそはした金で口封じのために問題を処理しようとしたのでしょう。)

アフリカ諸国の独立戦争における除草剤

1961年から1975年にわたるアンゴラ独立戦争の際には、ポルトガル軍はアンゴラ解放人民運動に対して除草剤を使用した。また、ギニアビサウ独立戦争の際にも、ポルトガル軍は人民革命軍(FARP)に対して除草剤を使用している。これらの地域で散布された除草剤はベトナムで使用された枯葉剤とは異なる。(科学文明が作り出した化学物質が、人類の福祉のために使われるのではなく、まさに正反対の人間に対する罪、つまり大量殺人のための兵器として使われている事実を皆さんどう考えますか？ノーベルがダイナマイトを作ることによって、人類の進歩に貢献したと思ったのですが、実は大量の人殺しのために使われた事実を知ってノーベル賞を作った罪の償いをしたように、モンサントは“ダイオキシン賞”を作った罪の償いをすることができるのでしょうか？ワッハッハ！)

麻薬作物と除草剤散布

麻薬作物の除去を名目としてコロンビアやアフガニスタンなどでラウンドアップなどの除草剤を空中散布する作戦が行われ、対象地区の農業や環境に甚大な被害を与えている。これらの地域で散布された除草剤はベトナムで使用された枯葉剤とは異なる。(化学物質こそが最後に残された人類の病気の原因であります。しかしながら化学物質無しに現代文明は維持できるでしょうか？不可能でしょう。だからこそ人類は胎児性遺伝子病により、退化し滅びていく運命を用意しているのです。)

今日はここまで 2012/06/14

「喘息手記」 匿名希望 46歳

2012年5月26日

平成21年3月22日。早朝午前6時前。

その早朝のJRの駅のホームに私は一人立っていました。三月の早朝はまだ寒さがそこに残る早春の駅のホームは、休日早朝とあって人気もなく、おまけに長い付き合いの喘息がいつものように喉元でわずかなノイズをたてるとあって、薄暗い一層寒々しく感じられました。吸入でごまかしながらそろそろとホームへの階段を降りて行ったのを思い出します。

朝早くに駅で電車を待っていたのは、そのわずか三日前にネットで見つけたばかりの大阪にある松本医院に向かうためでした。

三日前、と書きましたが、隣町くらいだったならばおそらく見つけたその足でサンダル履きのまま松本医院に駆けつけたことでしょう。

ネットで見つけた翌日は祝日で病院はお休みで、続けて週末でしたが、休日だし春休み期間中で病院もさぞかし混んでいるだろうから翌週に、という考えはどこにもありませんでした。

とにかく一刻も早くここに行かなくてはならない、そのくらい当時の喘息の状態には切羽詰ったものがあり、まさに藁をもつかむ思いでした。

問題は地理的な距離でした。北海道や沖縄から通われる方に比べれば比較的近い部類になりますが、なんとと言っても当時はトイレに行くのさえ青息吐息の状態でしたから、大阪まで行って帰れる自信がまるでありませんでした。

しかしこのまま座していても喘息が良くなる事がないのは誰より私自身が分かっている事でしたので迷いは全くありませんでした。

どうせ倒れるなら大阪に向かう途中で、と腹は決まっていました。

前夜は早めに就寝したものの喘息の調子が良くないこともあって結局熟睡には程遠く、朝の2時くらいに目が覚めてしまい、そのまままんじりともせず朝を向かえ、駅に着く頃はまだ空が白みかけたばかりでした。

こうして、私は、喉にはかすかな喘鳴、目の下にクマ、手には万一途中で動けなくなった時のことを考え、「私は喘息です。発作で苦しいので救急車を呼んでください。」というメモ、そして胸には最後の期待を持って、始発の電車に乗り込んだのでした。

私の喘息は3才からのおつきあいです。発症当時の状況を私自身は全く覚えていないのですが、両親によると、大阪万博に私を連れ出したところ、帰ってから声が出なくなったのが始まりだそうです。

物心ついた頃から、特に秋口でしたが、年に数回発作をおこし、その度に車で40分かかる日赤に駆け込んで太い注射器で注射をしてもらうのがひとつの風景になっていました。

小学校3、4年の時には、同じ喘息を患うお友達の紹介で片道二時間半もかかる隣り県の病院のふた月ごとに通い、5、6種類のお薬を飲んだこともありますが、あまりに遠方で通うのが大変だった事と、それほど症状に変化が見られなかったため、2、3年で通うのを止めてしまいました。

引越しをして環境が変わったためか、小学校高学年でひどい発作を起こし、初めて喘息で一週間ほど入院しました。

神経質なくらい生活に気をつけていたのでそれほどひどい発作は滅多におこしませんでした。中学以降も吸入器は手放せず、ちょっと疲れたり、急に冷え込んだりすると発作を起こしては病院に駆け込むのを繰り返していました。その頃には喘息は身体の病というだけでなく、立派な心理的コンプレックスになっていた事もあり、自分としても何とか喘息を克服したいと、サプリは言うに及ばず、断食・気功・健康寝具まで、効くと言われたものはありとあらゆるものを試しましたが、喘息と縁を切るには至りませんでした。逆に人の倍は健康に気を配っているのに改善が見られない状況に却って落ち込んだりしていましたが、それでも発作の出ていない時は健康な方と同じ生活ができるし、また手持ちの吸入でほとんどの発作は収まっていたので、吸入でだましまし生活する日々が続きました。

30代半ば頃から、秋口になると数回点滴を受けないと季節を乗り越えられなくなり、俄かに危機感が強くなりましたが病院の先生に相談してもステロイドを勧められるだけで他にこれと言った打開策も見当たらず、今後このまま悪くなっていったらと思うと暗澹たる気持ちになっていました。

この頃、ステロイド吸入が一般的な治療となった事もあって、お医者さんには「(喘息に使うステロイドは)アトピーに使うステロイドに比べたら量が非常に少ないから大丈夫」と、事ある事にステロイド吸入を勧められましたが、「量が少なくてすむのは皮膚と違って粘膜のほうがより過敏だからではないのか？」という疑念が拭えず、また使って完治するならまだしも半永久的に使い続けられないといけないという説明にも却って薬への依存が増すだけではないのかという気がして納得がいかず、「ステロイドを使って有期で良くなるなら使います」と拒否してはいやな顔をされていました。

そんななか、松本医院に伺う前年になります。近隣環境が変わった事などから、夜眠れなくなってしまい、夜間、特に夕飯を食べた後に発作がおさまらなくなる日が続き、その年の秋から冬にかけてわずか三ヶ月ほどの間に二十回ほど点滴に通うことになったのです。救急車でも二、三度運ばれました。

喘息の点滴はこれを行えば即座に発作が収まる反面、身体への負担も大きく、頻繁にするようなものでないことはお医者さんに言われるまでもなく承知していましたが、如何せん点滴をする以外に発作を収める術がないのですからどうしようもありませんでした。

あまりのつらさに点滴をしなくて済むのならとそれまでいくら勧められても頑として拒否し続けていたステロイド吸入にも手を出し、セレベント、アドエアとお薬自体はどんどん容量の大きいものに移行し続けましたが、発作は収まる

どころかますます酷くなる一方で、ステロイドで喉の過敏性が増したためか、しまいには咳が止まらなくなってしまいました。

この頃になると、二時間おきくらいに吸入を使っても収まらないことが多く、メプチンエアーやホクナリンの他に、病院にあるような吸入器を利用したベネトリンの吸入も家で行っていましたが、メプチンを使うと、一瞬息が出来なくなり、その後になんとか一息つけるというような状態になってしまいました。

ベネトリンも使うと却って一瞬息苦しさが倍加することがあり、吸入をするために呼吸を整える、という本当に本末転倒な状況に、もし吸入が効かなくなったら、という言葉では言い表す事ができないような不安は募るばかりでした。当時の生活は朝目が覚めると体を起こす前にメプチンを使い、少し呼吸が楽になったところで、普通に歩けばわずか二、三步のベネトリンの機器のあるところまでソロソロと布団から這い出して行くのですが、そこまでたどり着くのがまず決死の作業でした。お風呂はもちろん入れませんし、数メートル先のトイレに行くのも命がけ、頻脈ぎみの早い動悸がいつも収まらず、少しでも無理をすると不整脈が出るような有様でした。

病院で処方されるお薬はどんどん強いものになり、吸入以外に飲むステロイドを処方いただいたのですが、ある夜、何をしても発作が収まらず、思い余ってそのお薬を飲んだところ、それまでに経験した事のないものすごい息苦しさに襲われ、すぐさま病院に駆け込んだのですが、点滴が効いて来るまでのあの時の苦しさでショックは未だに思い出すとぞっとします。

お薬で却って症状が悪くなったにもかかわらず、次の診察の際にその事を先生に話したところ、「そんな話は聞いたことがない」等々、効かないのがおかしいと言わんばかりで、逆に怒られる始末で、あまりの理不尽に返す言葉もありませんでした。

ことここに至って、このまま西洋医学に任せていたのでは廃人になってしまう、という私の強い懸念は確信に変わりました。他に治療法はないのか。

この息苦しさを解放されるのなら何でもやるつもりで、以降、息苦しさを押し、パソコンにもたれかかるようにして、毎日のようにインターネットで情報を漁る日が続きました。

が、これと言った情報がすぐに見つかるわけもなく、あまりの息苦しさと希望のなさに目の前が霞むような気がしたのも一度や二度ではありません。

松本医院を見つけたのはそんな落胆と焦燥だけが日増しに大きくなっていく日が一週間くらい続いた、三月の下旬でした。

喘息もアトピーも免疫の反応異常だというのは斬新な解釈であるにもかかわらず、喘息と寝起きを共にしてきた私にはすとんと腑に落ちるところがありました。

HPに書かれてあることにいちいち頷きながら読み終わった時にはここしかないと確信していました。

そして神は私を見捨てなかったのです。

冒頭書きましたように何とか電車に乗り込んだものの道中はやはり苦しく、特に岡山駅での乗り換えはまさに至難の業、でした。

瀬戸大橋線の電車から吐き出された大勢の人に押されるようにしてフラフラと歩く様子は多分、端から見れば、幽霊のようだったに違いありません。

なんとか新幹線ホームに辿りついた時はそれこそ気を失いそうでしたが、座席に腰を降ろして後はもう着いたら大阪だ、と思った時にやっと大阪まで行けるかもしれない、と思えたのでした。

新大阪駅で新快速に乗り換え、高槻に降り立った時は、誇張ではなく、おそらく登山家がエベレスト登頂を目前にしたような感慨深いさがありました。

駅でミスタードーナツがあるほうを聞けば大丈夫と思っていたのですが、なんとミスタードーナツが両出口側にあるということで、どっちに向かえばいいのか少し迷ってしまい、また郵便局を目印にしていたため少し遠回りしてしまいましたが、何とかミスタードーナツを見つけ、そこまでたどり着いて愕然としました。松本医院は二階にあったのです。

普通の人には何でもない階段が、この時の私には目の前に高くそびえる壁のようでした。一瞬その場にへたり込みそうになりましたが、このままでは西洋医学に取り殺されてしまうのは分かりきっています。

まさに死力を尽くして一步一步階段をゆっくりゆっくり上って行ったのでした。ようやくエベレスト登頂を果たし、しばらくは呼吸が苦しくて扉に手をかけたまま動けませんでした。それでもそこまでたどり着いた喜びが大きく喘息でなければ万歳三唱したい気持ちでした。

最後のドアを開けると、漢方の匂いと漢詩の額が飛び込んで来ました。

その時に直感したのでした。

「治る」、と。

お会いした松本先生は、「必ず治してあげる」と言ってくださり、握手してくださいました。とても暖かい手でした。

それを聞いただけでも蘇生の思いでした。

これまで地元で何十人もの内科の先生にお会いしたか分かりませんが気休めでもそういう風に言ってくださった先生は皆無でした。

まして、ここまで確信を以ってそうおっしゃってくれる先生に巡りあえた時点で、私の喘息はほとんど治ったようなものだったかもしれません。

採血を済ませ、処方いただいた二袋もの漢方薬を宝物のように抱えて青息吐息ながらも意気揚々と帰路についたのでした。

前の晩にあまり眠れませんでしたし、やはり無理がたたったか、二日後に再度点滴をする羽目になりましたが、以降、次シーズンの12月まで点滴に通う事はありませんでした。

さて、何とか松本先生にお会いでき、お薬を送っていただけることになったのですが、喘息の改善は一朝一夕にはいかないものでした。

いただいた煎じのお薬は大層苦く、また、茶色く濁っていて、某青汁のCMではありませんが、半年くらいは「う〜、苦い！」という台詞を口にする事なく煎じ薬を飲む事ができませんでした。それでも止めようと思ったことは一度もありません。前述しましたように当時は吸入すら効かないような状態だったので、当初は朝まず煎じ薬を飲んで、吸入ができる状態に持ち込んでから吸入する、というような有様でした。

感覚的なものですが、も西洋薬がひたすら力で症状を押さえ込もうとしているのに対し、いただいた煎じ薬も飲み薬も、喉の粘膜を宥め鎮める鎮静作用があり、薬の持つ特性が全く対極のように思えました。それはステロイドを使えば使うほど喉の粘膜の過敏性が増して咳が止まらなくなったのに対し、漢方薬では緩やかな効果ではありますが、その過敏になった粘膜を修復し咳やムズムズ感が次第に治まっていった対照的な経過からも裏付けられるように思います。

最初はこれまで寝込んでいた分を取り戻したいという焦る気持ちが強く、それから一年くらいは、いただいたお薬で多少具合が良くなると無理をしてまた寝込む、というサイクルを飽きる事なく何度も何度も繰り返しました。無理をする、と言ってもちょっとポットを持ってお茶を沸かしたり、新聞を片付けたり、という程度だったのですが、当時の私にはそれすら”重労働”で、

すぐに発作が起こり動けなくなるのでした。寒くなってからはとうとう無理がたたって二週間入院する羽目になりました。

もっと養生すべきだったと反省していますが、当時の私は全く体の自由が利かずにいた期間を取り戻そうという気持ちばかりが先走って空回りしていたように思います。

最初はお薬を飲んででも全く変化を感じる事ができず、変化を自覚できるようになるまで一年くらいかかりました。それくらい喘息をこじらせてしまった事には忸怩足るものがありますが、先生もお話されていたように、松本医院を訪れる方々は私と同じようににっちもさっちもいかなくなってから駆け込まれる方が多いのだと思います。もっと早く知っていたら、という気持ちはおそらく松本医院を訪れたどなたもが多かれ少なかれ思うところではないでしょうか。

それくらいこじれた喘息でしたが、それでも時間の経過とともに、色々と自覚できる変化が見られるようになってきました。まず最初に変化したのは咳です。元々私の喘息は咳を伴わない呼吸困難だけだったのですが、ステロイドの使用前後から少し風が吹いたり、飲み物の蒸気にあたっただけでも咳が止まらなくなっていました。咳き込む回数が目に見えて減りました。次に痰が良く出るようになりました。病院で点滴をしてもらおうと痰が切れて楽になるのですが、痰が出るようになるという事は私にとっては非常に歓迎すべき事でした。

それでも喉のムズムズイガイガとしたむずがゆさが取れたのは随分経ってからで、最後まで症状として残ったのはやはり呼吸のしにくさでした。これは今でも急に冷え込んだり疲れが重なるとメプチンを使う時もありますが、それでも松本先生にお会いする前と比べれば劇的という言葉が誇張でないほど症状は改善しました。

初めて松本医院に伺ってから一年半後の平成22年の秋に松本医院に伺った際に、高速バスの乗り場までの急な階段をそれほど苦勞せずに上れた時には、決死の覚悟で一段一段息をつきながら登った最初の診察の時を思い出して感動のあまり叫び出しそうでした。

喘息のほうはこのように大変ゆっくりとはありますが、順調に回復曲線を辿ったのですが、先生が予言されたとおり、喘息が大人しくなるのと時を同じくして、昨年12月中旬に何の前触れもなくいきなりものすごい眩暈と吐き気に襲われ、救急車で病院に到着して点滴を受け始めても吐き気が収まらず、かれこれ一時間近く吐き続けるという有様で、これまで喘息には随分悩まされたものの、消化器系は非常に丈夫でしたので、吐く事そのものと同じくらい心理的な

ショックが大きかったです。こんな時に喘息の発作が起こると厄介だなと頭の片隅で考えていましたが、不思議と発作は全く起こりませんでした。

松本先生の症状変化のお話を聞いて頭では理解していたつもりだったのですが、まさか喘息がアトピー等ではなくこんな風に”変身”するとは思ってもよらなかったため、一体何が起こったのかと動揺と混乱は相当なものがありました。これも先生にご相談して、症状がそのように変わる事もあるというお話を伺い、またいただいたヘルペスのお薬のおかげで12月のように病院に行かなければならないような事はそれ以降起こっていません。症状そのものが出る出ないより、もし松本先生にお会いしていなければ、またぞろ病院で、検査漬け薬漬けになり、何より不安で一杯でこんな心の安心を得られなかっただろうと思うと本当にぞっとします。でも、もしお会いしていなければ、症状がヘルペスに移行するところまでおそらく辿りつけなかった事でしょう。

まだ疲れた時や頭を思い切り動かした時などにフラフラする事がありますが、生活に支障が出るような事はありませんし、あの生死の狭間を彷徨うような喘息の苦しさとは比較になりません。

時間はかかりましたが、最近になりようやくごく当たり前の生活が送れるようになり、それがどれほど嬉しい事か、健全な方には、普通に呼吸ができることが楽しいというこの感覚はおそらく想像ができないと思います。

思えば、西洋医学が自己免疫機能を代替することに意義を見出し図らずも自己免疫と競合・反目する立場に舵を切ってしまったことは、そしてその西洋医学が東洋医学や民間土着的な療法を凌駕して医学のスタンダードとなってしまったことは、人類の医療の歴史において最大の悲劇だったのではないのでしょうか？

そして、人々は本来自分が治癒能力を有しているにもかかわらず、病気の治療を外部化してシステムティックに依存することによって医療が一大産業分野として肥大化し、結果として莫大な医療費を通じ世界の政治経済にまで及ぶ影響力を持ち、また個人レベルでは、まさに医学界に生殺与奪の首根っこを押さえられた形になって、唯々諾々と医師の指示に従うほかなく、そのことによってひいては自己免疫機能の弱体化や阻害を引き起こし、他方いらざる投薬等でアレルギー疾患は減るどころか蔓延し、ますます医療に頼らざるを得ない図式が構築されてしまった事自体、一つの悲劇と見る事は大げさでしょうか。そして、松本先生が指摘されておられるように、患者一人ひとりが自らの身体の声に耳を傾けることなく、ただ“あなたはこの分野の専門家ではないから”という医師のただ一言だけで思考停止し、自らの健康と生命を盲目的に委ねてしまうのは、本当になんという悲劇なのではないでしょうか。

松本先生のお話を伺っていると、松本医院に出会う前に試み、喘息を断ち切るには至らなかったものの共感を覚えた様々な療法が思い出されますが共通しているのは自己免疫を強化して病を克服しようというその方向性です。

断食療法で有名な石原結實先生は、著書で、“外科の先生の言うことを聞いて手術を行った者は誰一人数年後には生存しておらず、ただ先生の提案を拒否して石原先生の下で自己免疫強化に取り組んだ自分ひとりが生き残った”という患者さんのお話を掲載されていました。

また鍼灸治療の一種である井穴刺絡という施術を行っておられる稲樹先生から、“病気は自分で治すもの”という言葉をいただいた時、実際に自分の喘息治療を通じて西洋医療に十分懐疑的なつもりでいた私自身でさえ、“病気は病院で治してもらいもの”と知らず知らずのうちに思い込んでいた自分の思い込みの深さにはじめて気づいてひどいショックを受けたのを覚えています。

それくらい強固な“刷り込み”がなされている事をまず患者側は自覚しなくてはならないと思います。

NHKのクローズアップ現代で一見農薬との戦いに敗れたかに見える雑草が、数年後、農薬に耐性を持つスーパー雑草として更に強靱になって再び復活するというニュースを見た事があります。

中には解毒作用を持つ肝臓のような機能を備える雑草まで現れたとか。雑草に悩む農家の方々等には申し訳ありませんが、雑草のたくましさ心に快哉を叫ぶとともに、なんと素晴らしい自然の摂理かと感嘆すると同時に松本先生の遺伝子の2倍返し3倍返しというお話を思い出さずにいられませんでした。

そしてその遺伝子の反旗は本来人間と敵対するものではなく、その2倍返し、3倍返しがあるからこそ、人間は分をわきまえ自然の摂理に対して謙虚でいられるのではないかと考えています。そしてこの考え方は何も医学に限定される事なく人間の社会活動全てに適用されるべき大原則のようにも思えます。

アトピー・喘息をはじめとするアレルギー疾患の蔓延は前述した強固にシステム化した医療の囲い込みの構図に対する自然の摂理からの鉄槌ではないのでしょうか。

原発の爆発も人間の奢りがもたらした部分が少なからずあったと個人的には思っていますが、人間は人間を逸脱して神を気取ることはできません。大震災以前に、原子力行政において、原発の危険性を真摯に叫び続けてきた人々は常在野で冷遇されていた構図はおそらく医学界においても全く変わらないのだと思います。

真実を直視し、それを認め、その前に頭を垂れる先生の姿は、自然に対してあるべき人の姿を指し示しているように思えます。

おそらく気の遠くなるような試行錯誤と尊い人的犠牲の上に、漢方を体系化した中国の先人達の絶え間ない努力と、その漢方に、免疫を邪魔する事なくそれを助けるといふ本質的な価値を見出した松本先生の慧眼と、そしてなによりもその真実の心もとない小さなカンテラただ一つを頼りに、医学界を向こうにまわして毅然と立ち続ける姿は、その困難さを鑑みれば、まさしく奇跡と呼ぶほかありません。

いつか先生はおっしゃっておられました。

“真実はひとつ、そして真実がすべて”

まさしくその通りです。しかしながら真実に寄り添い続けることがいかに困難かということは、私の想像をはるかに超えていました。

本当に棺おけに入らず今こうしてこの手記が書けるのも、松本先生と、先生の後ろに長く連なる、およそ検査機器も何もない時代にここまで漢方を体系化してくださった数知れない中国の先人達のお蔭であり、いくら感謝しても足りない思いです。

今回、その勇気と良心と飽くなきご努力への感謝と敬意に代えて、そして未だ松本医院に巡り会えず、病そのもののみならず、その対抗手段として絶対的かつ独占的な存在して立ちはだかる西洋医学の呪縛とそれによって齎される薬漬けというアリ地獄のスパイラルでかつての私と同じように苦しむ方々が一刻も早くそこから抜け出せるよう、にとの一存で本稿を書かせていただきました。

今、政治経済の分野ではこれまでのシステムが様々なほころびを露呈し、あるいは破綻してその行き詰まりを露呈し、大変革期を向かえようとしています。医療においても既得権益の頑健さは決して他の分野に引けをとらないでしょうが、アフリカの政変同様、患者の側からの一大変革が起こることを願ってやみません。

そして、松本医院を訪れる方々はその”先駆”なのだと私は思っています。一人でも多くの方が自分の目で、自分の肉体で、真実を読み解き、救われる事を願って止みません。

我が家にはルルドという名前の犬がいます。あまりの喘息の苦しさに縁起担ぎでつけたような名前ですが、大阪の高槻に日本のルルドの泉は確かにありました。

同じ病に悩む人々がその泉を訪れ癒される事を願うばかりです。

最後までお読みくださりありがとうございました。